

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1291 号	氏 名	柳 沢 俊 光
論文審査担当者	主 査 中 沢 洋 三 副 査 竹 下 敏 一・古 庄 知 己		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>RS ウイルス感染症は日本において冬季に入院を必要とする主要な疾患の一つであり、特に早産児、慢性肺疾患、先天性心疾患を合併する乳幼児は重症化のリスクが高く、重症化の予防として流行開始時期からパリビズマブの投与が行われている。また 2013 年より免疫不全、ダウン症候群に対しても保険適応が追加されている。我々は長野県における RS ウイルス感染入院患者の全容を把握するために、この調査を実施した。</p> <p>2016 年 4 月から 2017 年 3 月の 1 年間に RS ウイルス感染症で入院した症例を対象として、長野県の主要小児 11 施設にアンケート方式を用いて調査を行い後方視的に検討した。</p> <p>その結果、柳沢らは次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 調査期間中に 438 人の RS ウイルス感染症患者が入院した。患者背景としては 67.1%に同胞がいた。基礎疾患を合併していたのは 16.9%で気管支喘息の合併が多かった。2. 一般病院に入院した患者は 420 人で、一般病院の年間入院患者総数に対する RS ウイルス感染患者の割合は平均 7.0%であり、病院間の比率にばらつきはあまり見られなかった。調査施設から三次施設に転院となったのは 8 名だった。3. 早産児の割合は 7.8%だったが、多くがパリビズマブ投与適応月齢より月齢が超過しており投与の適応が無い症例だった。一方でパリビズマブの適応があったが、投与が間に合わなかった症例は 7 名だった。4. 入院時点での年齢の平均は 1 歳 4 ヶ月 (日齢 12~9 歳 6 ヶ月) であった。また入院数は 10 月~12 月にかけて増加し、同年度の長野県の定点報告数と一致していた。酸素の投与が必要だったのは 69.2%で、人工呼吸器管理が必要だったのは 1.8%だった。全ての症例で症状は軽快を認め、死亡または後遺症を認めた患者は一人もいなかった。5. パリビズマブを投与されたにもかかわらず入院となった患者は 6 名 (早産児 3 名、先天性心疾患 3 名) だったが、いずれも人工呼吸器を必要とすることは無く軽症だった。 <p>パリビズマブの抗体量がしっかりと上昇するには 2 回以上の投与が必要であり、今回パリビズマブ投与後に感染した 6 名に関しては月齢と入院月から、いずれも 1.2 回しか投与がされていないと推察され有効に抗体量が上昇していない可能性があった。しかしながら、いずれの症例も重症化は無く軽症で退院した。パリビズマブ投与は流行時期より 1.2 か月前に投与が開始されることが望ましいと考えられた。よって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			